

学研都市に生きて

都市開きから12年



■ 2 ■

「国際電気通信基礎技術研究所」(ATR、精華町)の外国人研究者は64人。学研都市の施設で最多だ。研究と平行して日本語を学ぶ外国人も多いが、この日本語学習サークルはちょっと変わっている。漫画がテキストというのだ。

広がる草の根異文化交流

先月6日の昼休み。昼食のパンやジュースを持って10人が8畳間の社内休憩室に集まってきた。アメリカ人、中国人、そして日本人もいる。テキストは長編SFサスペンス漫画「20世紀少年」。

1人が1コマずつセリフを日本語と英語で読み上げる。「この『許す』は『permit』の意味ね」。講師役のイギリス人研究者、ジョシユア・ヘイルさん(29)の声が響いた。

この「漫画クラブ」は半年前に始まり、毎週金曜日に「開講」。科学と

日本語教室を実施した

外国人支援

いる。同オフィスの辰田真起子さん(33)によると、相談件数は月平均80件程度。ビザの申請方法や社宅のごみの分別方法、近くの観光スポット紹介など多岐に渡る。辰田さんの「『助かった』と言はんは、『助かった』と言はんは、約80の地元個人

学ぶテキストとしても、辞書を引いて勉強する素材としても漫画は最適」とヘイルさんは話す。

関西文化学術研究都市推進機構によると、学研都市の外国人研究者は10年前に80人だったが、今年4月時点で214人に増加した。

ATRの研究員は、期間プロジェクトごとに契約を結ぶケースも多く、入替わりは頻繁で、平均滞在期間は半年〜1年程度。即戦力としてすぐ

に研究に没頭できるように、外部講師による日本語教室を実施した



電子辞書を駆使しながら日本の漫画で日本語を学ぶ外国人研究者ら
—精華町のATRで

「マン」指導をし、日本語が話せない外国人の出産に立ち会ったりしたこともある。

こうした活動を通じて、濃密な個人関係を築くことにつながり、クレジットカードのやり取りなど交流が続くケースも多いという。事務局担当の北野幸子さん(52)は「手助けする過程でさまざまな異文化に触れられた」と喜ぶ。

外国人にとって住みやすい街は日本人にとっても暮らしやすい街と言えるはず。個人間の交流の積み重ねが最終的には学研都市の総合力を高めていくように思える。

【新宮達】



18.11.16